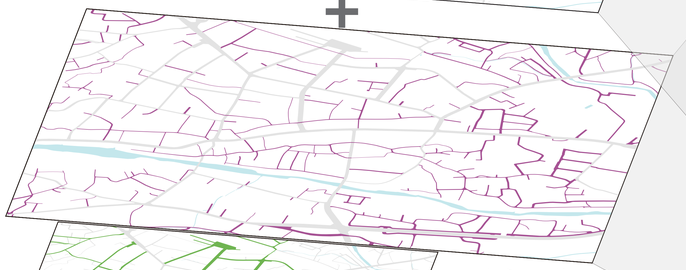
水路とともに作り出された小川の生活景

実は小川の町中には水路が張り巡らされている。これを道の構造からもみてみると、
水路とともに作り出された小川の生活の様子が浮かび上がってきた。

張り巡らされた水路

小川町は昔から豊富な地下水が湧き上がる場所である。
そして、農業用水や生活排水などのために水路が張り巡らされている。
その水路は秩父往還などの主要な街道の一本裏の道を、地形に沿って曲がりながら流れたり、槻川に向かって直線的に流れたりする。

そうした街中を流れる水路は、日常生活においても利用されてきた。
水路は住民にとっては最も身近な水のひとつである。



くらす道

裏路地は家が多く、生活の場になっている。
そして住む人たちの生活の様子を感じることができる場所でもある。

裏路地の多くは自然地形に沿って少し曲がった道となっている。
槻川によってできた河岸段丘が広がる市街地の南側には、
高低差を避けるように秩父往還と並行し南浦通りと北浦通りが貫く。

裏路地ながら回遊性が高く、車通りが少ないので
よそ者にとっても実は歩きやすい道である。

ささえる道

街区を構成する道は、人々が往来する重要な道である。
人通りが多く、お店や施設が集中する便利な場所である。

地域の骨格を形作る道はカーブが少なく見通しの良い通りも多い。
車が通りやすい幅の広い道路である。

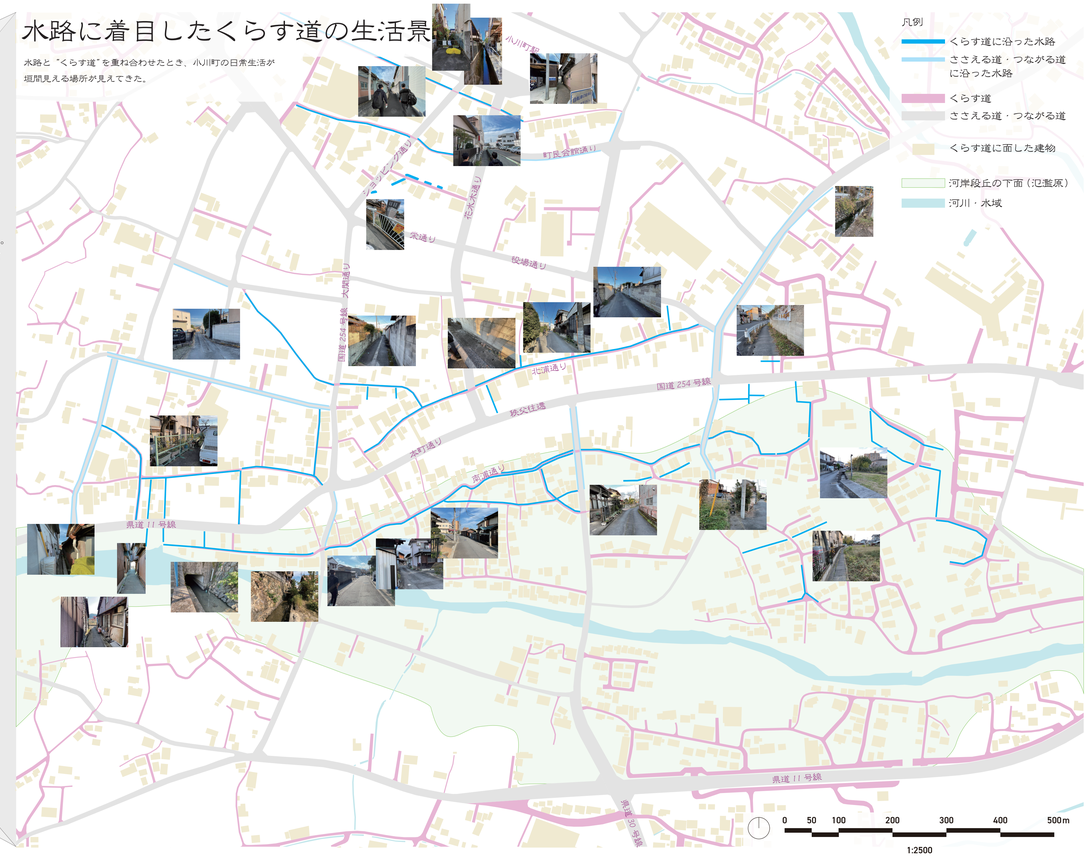
つながる道

江戸・東京や秩父など、他の町と結ばれる、小川の経済を支える道。
小川の中心部を貫く国道254号線は、川越、池袋を通り、東京大学のある本郷までつながっている。

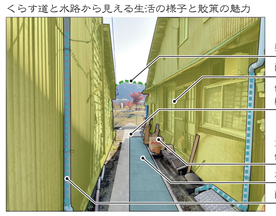
古くから人々の往来があり、鎌倉街道と秩父往還の交わる交通の要衝だった。
小川町はこうした他の町とのつながりによって発展した。

水路に着目したくらす道の生活景

水路と“くらす道”を重ね合わせたとき、小川町の日常生活が
垣間見える場所が見えてきた。

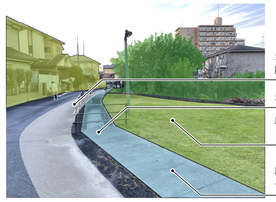


くらす道と水路から見える生活の様子と政策の魅力



奥には対岸の山の山頂が望める。
両隣の住居が額縁のように景色を切り取る。
住居の間を流れる水路が、槻川に向けて視線を誘導する。
大きいものや外で使うものなどを置き、住居の一部として使われている。
水路に蓋がされ、上を人が通ることができる
雨樋から雨水が流れ、水路に注ぐ

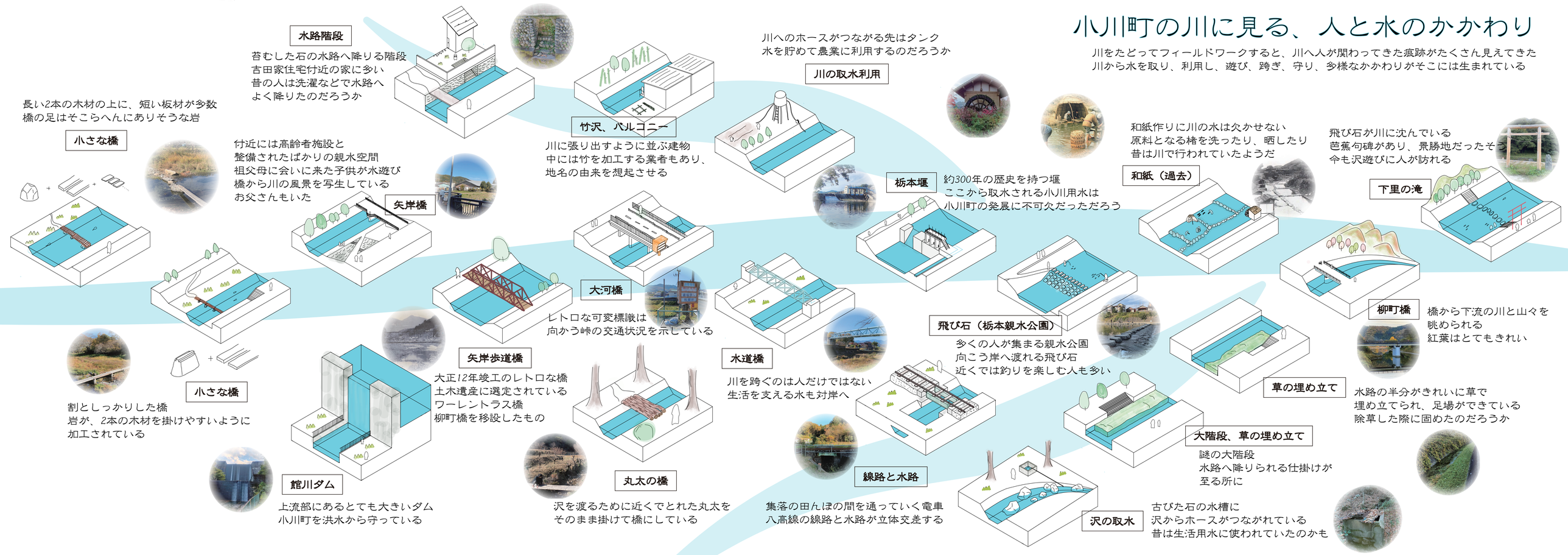
道路と建物を隔てる形で水路が流れる。
水路に蓋がされ、上を人が通ることもできればものを置くこともできる。
水路の上に植木鉢が数多く置かれている。
デッドスペースにはせず、
この路地に彩りを与えている。



カーブによってその先が見えない。
散策するときの景色の変化を生んでいる。
水路が地形に沿ってカーブを描いている。
以前は田んぼで、この水路の水が使われていたと考えられる。
以前は洗濯や水遊びなどもされていた。
今でもザリガニ釣りをすることもあるよう。

提案　取り外せる水路の木板

水路は古くから日常生活で利用されてきた。
近年水路が閉じられ使えなくなった。
もし、水路が使えるようになったとき、どういった生活になるのだろうか。子供の遊び場になったり、人の交流が生まれたりするかもしれない。
新たな小川の水の価値を作る試みとして、
水路を覆うコンクリートを取り外し可能な木板に変えることを提案する。
使うときだけ板を動かし、洗濯や釣りなどに使うことができる。

小川町の川に見る、人と水のかかわり

川をたどってフィールドワークすると、川へ人が関わってきた痕跡がたくさん見えてきた
川から水を取り、利用し、遊び、跨ぎ、守り、多様なかかわりがそこには生まれている